

濁流の魚待ち続ける

「アホマチ」という、面白い名前のついた漁法がある。かねがねその技を聞きたいと思っていたところ、野洲川の河口部に近い守山市小浜町の漁の様子を聞き取り調査する機会が得られた。地元出身の男性(76)によると、昭和25年から35年ごろにかけて、小浜町で4〜5人ほどがアホマチに携わっていたという。

アホマチは10月、増水した野洲川を遡(さかのぼ)ってくるアメノイオ(ビワマス)を狙う。道具はサデ網1本。テニスのラケットのような楕円形(だえんけい)の枠をもつ大型の網を使う。この時期にとれる、卵をたくさん持った大物のビワマスで作るアメノイオご飯は、家族の最高のごちそうだった。

改修前の野洲川の河口近くは屈曲が多い複雑な流れだった。アホマチをするには、岸の地形の変化を見極め、夏の8月のうちに岸辺に「足場」をつくっておく。材料は堤防の藪(くさむら)に生えているマダケ。こ

れを幅60センチ、長さ1尺50センチほどの小さい棧橋(かき)のような形に組み合わせる。大人ひとりぎりぎり立てるサイズである。

アホマチができるのは、台風などで上流に大雨が降ったあとに限られる。チャンスは

1年間で数日くらいしかない。増水時の岸辺の水深は1尺〜1尺20センチほど。大人でも怖がるほどの茶色の濁流で、子どもはぜったいに近寄れない。両手でしっかりと網をも

ち、激しい水の流に網を沈め、流れに平行に、上流から

下流へと網を動かす。素早くすくわないと、流れに押されて網が裏返ってしまう。これを朝から一日中繰り返し、ビワマスが網に入る瞬間を待ち受ける。

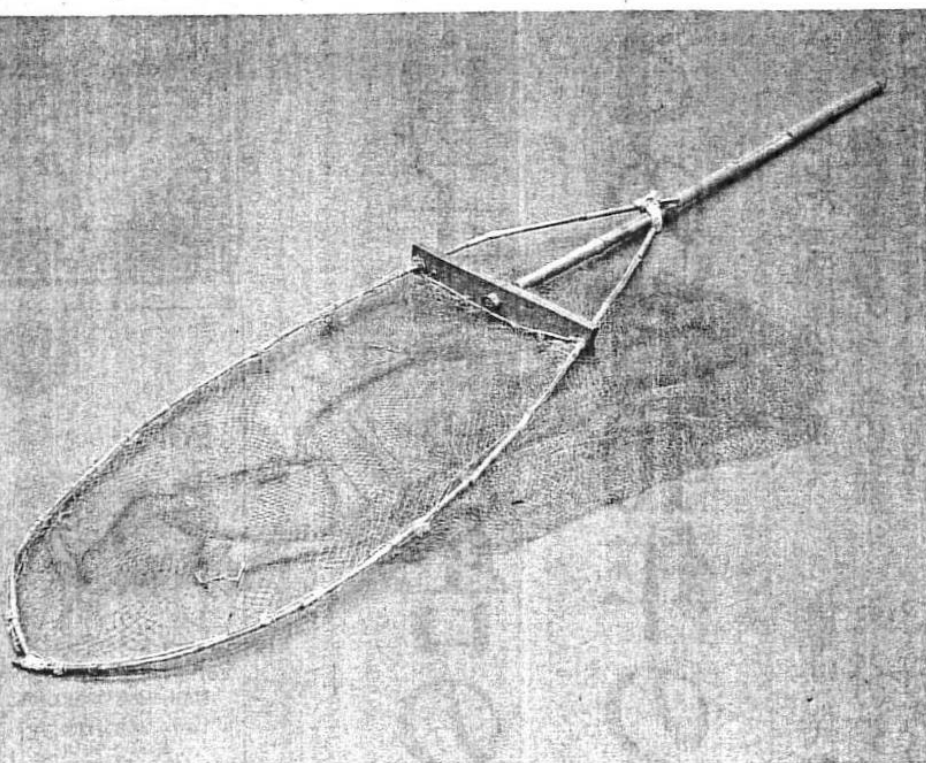
きつい水流をずっと見ていると目がまわって、自分も引き込まれるような錯覚をおこす。酔わないように、水面と対岸の堤防をかわるがわる眺めて漁をしたそうだ。

濁流のなかの魚はもちろん見えない。いとれるかは運次第である。1匹つかめたらもう満足で、竹の枝に魚をさして意気揚々と帰ってくるが、とれなければ夕方まで止められない。

川幅100尺をこえる野洲川の本流で、わずか幅30センチの網に魚がぶつかる機会を待つ。濁流のなかの見えない魚を狙って空振りが続ける、気の遠くなるような漁である。ひたすら「待ち」を決め込む漁の仕方が、この愉快な響きのする漁法名を生み出したのだろう。

(琵琶湖博物館主任学芸員 渡部圭一)

|| 隔週木曜掲載です



サデ網(全長271.6センチ、幅52.0センチ)

おのみ漁具図鑑